

Onの多義性：認知意味論の 英語教育への貢献

木内 修

1. はじめに

本稿の目的は、英語のonの多義性を認知意味論的観点から体系的に説明し、さらに英語教育への貢献を期待するものである。そもそも理論言語学が英語教育への適用を試みたのは、いまに始まったわけではない。生成文法が、まだ変形文法と呼ばれた時代、英語教育への応用が日本でも試みられたが、実を結ぶことがなかった。その原因は変形文法が形式主義を探ったところにある。言語とは能記と所記が恣意的に結合したものであるが、生成文法の研究はこの言語の本質である「意味」から乖離していたのであった。そのことを反省材料に、意味を十二分に視野に納めた認知意味論的観点により英語を記述・説明し、その知見を英語教育に応用するべく考察を試みることにする¹。本稿は、とくに日本人英語学習者が苦手とする前置詞を如何に教授すべきかを探究する研究の一部に位置づけられ、今回はonをその研究対象として取り上げることにする。

2. 辞書的定義

さて、ここでOED (*Oxford English Dictionary*) におけるonの捉え方を見てみよう。

General Sense: The preposition expressing primarily the relation of contact with or proximity to the surface of anything, and so that of being supported or upheld by it.

“General”というわけなので例外はあるものの基本的には、「接触」と「近接」であることが分かる。そして対象を「支持」する機能が働いていることも分かる。

また、同じ Oxford 系の辞書であり、学習用英語辞典である OALD (*Oxford Advanced Learner's Dictionary*) の on の前置詞の語義は、“in or into a position covering, touching or forming part of a surface”, “supported by sb/sth”, “used to show a day or date”, “about sth/sb”, “at or near a place” など 18 項目に亘る。また、副詞では “used to show that sth continues”, “connected or operating; being used”, “on duty; working” など 9 項目が存在する。このような語義の細分化は、学習用辞典の長所でもあり短所でもある²。一方において、英語を学んでいて意味が分からぬ單語に出会った場合、個別・具体的にその場面に対応する意味があれば、そこでは非常に有益ではある。しかし他方において、あまりにも多義として扱われると、その单語の本質を捉えることが困難となる。とくに单語の中でも、その数が限られている機能語に関しては、個別・具体的な意味の理解より、いわゆるプロトタイプたる中核的意味の把握が必要不可欠であるというのが本稿の立場である。

辞書に見られるそれぞれの語における定義に関して、その必要十分条件は、存在しない。一見、on の適応できる対象は人間であったり、「もの」であったり、さらに「こと」であったりするため、一貫した説明が困難なように思えるのである。アリストテレス以来の古典的カテゴリー観では、カテゴリーは必要かつ十分な属性の集合によって定義されるものと考えられている。何よりも、この古典的カテゴリー観の意味分析に関する限界がそこにあり、ヴィトゲインシュタインが打ち出した家族的類似性 (family resemblance) を基にしたようなカテゴリー観が必要となってくる。現在の認知意味論のカテゴリー観は、カテゴリーの中心メンバーをプロトタイプと呼び、その中心から離れた周辺部分のメンバーには、「それらしさ」が薄れてくる。このメンバーに関する基準は、ある条件を満たす、満たさないといった「真偽」というものでなく、そのカテゴリーの典型例たる「良い例」から非典型例たる「悪い例」すなわち非典型例へという段階性を有するものである。次節より、これらの諸用法の関係をさまざまな認知意味論的概念を援用し、on の多義性を明示していくことにする。

3. 空間にに関する語義

OEDにおけるThe preposition expressing primarily the relation of contact with or proximity to the surface of anything, and so that of being supported or upheld by itという一般的な意味の捉え方は、まさにonの空間に関する表現を基本と考えていることが分かる³。また、Sweet (1891:139) では、前置詞の意味を物理的意味、時間的意味、そしてその他抽象的な関係を示す意味に分けている⁴。具体的であり、直接経験できる身体的知覚である空間認知は、抽象的であり、精神的認識を基盤とする悟性というレベルで認識される時間認知とくらべると、より認識されやすく、より基本的な認識プロセスであろう。そこで本稿では、空間と時間というレベルを設けて考察を進め、それぞれの語義の中に典型性と非典型性を見出し、さらにその関連を明らかにしていきたいと思う。

(1)の例がonの代表例ともなる、ある対象への上からの接触である。接触というものは上、下、横のどこからも実現が可能であるのだが、重力が存在する地球上では、ものの上からの接触が一番安定しているため、このような事例が頻度的にも多く見られるのである。(2)の例では、何かを身に付ける場合において、そこでは身体と身に付ける物との接触が生じているので、onの字義通りの解釈で一見問題ない。しかし同じ、物理的接触でも(3)の場合と今の(2)を併せて考えると、それは一瞬の接触であり、(1)の継続的な接触とは、時間という観点で少々異なる。

(1) On the ground, twice that number were readying for takeoff.

(A. Hailey, *Airport*)

(2) Then he went to the next room and put on his heavy shoes.

(E. Caldwell, *A Very Late Spring*)

(3) Amos was not hurt, but Ester stuck her knee on a chair and cut a deep gash in her leg.
(E. Caldwell, *An Autumn Courtship*)

さて、つぎの例は、物理的な接触から、いわばメトニミー的な拡張された

用法として考えられる⁵。つまり逮捕されるとは、身柄を拘束され、ある意味で警察と接触することである。警察と接触状態になるということから、その結果である「逮捕される」という意味が容易に連想されるのである。

- (4) "Anybody comes looking in my window," I said, "they'll have the cops on them...."
(R. Carver, *The Idea*)

つぎの(5)は、(4)とはまた異なった点で、「接触」の拡張事例であろう。これは、正確には接触と言うよりも「膿疱」は身体の一部である。しかしその膿疱はそもそも正常時の身体には存在しないものなので、膿疱と膿疱でない部分とを区別し、互いが接触していると「見なし」ているのである。また(6)では、椅子と椅子の脚は完全に全体と部分の関係である。

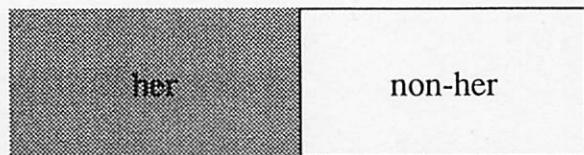
- (5) Now, like pustules on a battered, weakened body, trouble spots were erupting steadily.
(A. Hailey, *Airport*)

- (6) Eventually the light swelled so that all the lines of the varnished beadboard walls stood clear, and Inman could cock back on the chair's hind legs and count the flies on the ceiling. He made it to be sixty-three. (C. Frazier, *Cold Mountain*)

さて、onの用法が、人間に対象を理解・把握する際の認知過程の反映であることを手掛りに説明を試みたが、次の事例は更に進んで、「それとそれ以外」の区別をするさいに、「それ以外」の部分が背景化し、言語化されない場合である。(7)では、この論理を突き進めた先の言語表現が成立している。この世の中は、彼女と彼女以外で構成されているということは形式論理学上、真である。すると下記の図式のように、彼女と彼女以外の「切れ目」に接触部分が成立し、このために接触のonが使用されているとの説明が可能となる。つぎの“the opposite sidewalk”に関する捉え方も同じ原理である。このような心理的な投影、つまりは「見なし」による接触を、本稿ではなく抽象接觸>と名づけよう。

(7) She knew he didn't want to speak much until the first drink was finished, and she, on her side, was content to sit quietly, enjoying his company after long hours alone in the house. (R. Dahl, *Lamb to the Slaughter*)

<図1>



(8) "What!" says he, stopping on the opposite sidewalk and pushing back his hat.... (O. Henry, *Tobin's Palm*)

このような抽象接触は、共感覚を媒介項にして、「触覚」関連の語句以外とも共起可能となる。(9)の例は、視覚のシンボルたる eyes が主語になって、「視線の投影」が him になされている。(10)は対象同士の相互的抽象接触である。視線の投げかけも本来、視点は look at のように点の解釈である at が選択されるはずであるが、(9)のように相手をしっかり視覚上捕らえる場合は支持・支配の解釈として on が使用される⁶。つまり smile at と smile on の間の示差性は、前者が行為の方向を示しているだけであるのに対して、後者は on の接触のイメージから「支持・支配」を経由して、その対象への「影響」が生じてくることになる。(11)の例のように、犬と犬の縄の接触面は点であるが、その点によって犬を支配し、支持・支配しているために基点としての on が使用されているのである。

(9) Her eyes waited on him for an answer, smile, a little nod, but he made no sign. (R. Dahl, *Lamb to the Slaughter*)

(10) He was interrupted by a summons to dinner; and the girls smiled on each other. (Jane Austen, *Pride and Prejudice*)

(11) Two ladies in hats are air kissing. One holds a small dog on a leash.

(Ann Beattie, *Perfect Recall*)

さらにこの抽象接触の事例を見ていこう。明かりが点いているということは電気が通電状態にあるということで、電気が繋がっていて一種の接触というイメージを形成している。また、(13)では、本当にher heelsに接触しているわけでもないことは、closeという語によって明らかである。しかし、ここでonが使用されているのは、心理的に後について離れないという心理の投影である。この抽象接触の機能を経て、(14)や(15)のonは近接関係を意味することになる。

(12) It wasn't six o'clock yet and the lights were still on in the grocery shop.

(R. Dahl, *Lamb to the Slaughter*)

(13) Sally followed close on her heels.

(Amanda Quick, *With This Ring*)

(14) ...we rode forward to an old French village on the river...

(C. Dickens, *American Notes*)

(15) We particularly remembered my mother's ninetieth birthday, when the whole family gathered at a seaside resort on the Baltic in the DDR....

(G. Blake, *No Other Choice*)

4. 時間にに関する語義

時間に関しては、(16)や(17)の例のように日付だとか、曜日などの24時間単位ものがonによって導かれる。これは、人間の創造物である「時間」という概念が、太陽を手掛けに時間の変化を認識し、つまり今、われわれが身体的に経験している時間的な認識であり、一番基準になりやすい基本的カテゴリーであるために、この24時間という1日を基本単位として採用されたものだと思われる。そして何かに基づく場合、ある対象に離れることなく、密接

に接触していることが要求されるのである。このことも24時間単位がatでもinでもなく、onが使用されることの動機付けとなっているのであろう。また24時間単位より短いはずの午前・午後などの概念も特定化という意識によって基準と見なされた場合、(18)のようにonによって導かれる。さらに、そのような事例が、一般的基準を意味する(19)である。また、それが時に転用されたものが、「基準時に正確に接触している」ということによる「定刻通りに」という意味の(20)である。

(16) It sometimes amused outsiders to see snow removal groups, plough blades down, blowers roaring, on a hot, sunny day. (A. Hailey, *Airport*)

(17) At half-past six on a Friday evening in January, Lincoln International Airport, Illinois, was functioning, though with difficulty. (A. Hailey, *Airport*)

(18) The train reached Baltimore in the middle of the night, unnoticed by anyone, and at six o'clock on the morning of February 23, Lincoln arrived at the railroad station in Washington. (William H. Rehnquist, *All the Laws but One*)

(19) Though I guess it depends on your point of view. (A. Hailey, *Airport*)

(20) He'd get to work on time each day and, at night, cut back on his drinking. (Manette Ansay, *River Angel*)

つぎの(21)から(23)までの事例は、いわゆる時の接触というものである。当然、この用法の基盤には物理的接触関係からのアナロジーが働いたということは容易に想像がつくであろう。図2のように事態AとBが時間的に隣接して起きた場合、その因果関係とは係わらず、表面上はお互いの事態が連鎖して起きたものと認識され、具体的・物理的接触の意味を表すonが使用されている。当然、意識の上で事態CとDのように連續性が断続されているものと認識された場合には、onは使用不可能となる。実際には(23)などは、下線を引いた“said”と“on the point of going out together for a walk”との時間的近接性をし

めしており、「…と言った。かれと子供は一緒に散歩に出かけるところだった」という解釈が成立するのである⁷。さらに(24)の場合は、時間の積み重ねである年齢で「14歳に間もなくなる」という近接によってonが使用され、現時点での年齢である「13歳」の部分には「点」としてのatが要求されている。

(21) On leaving her, she went to the Consulate, and her last doubt was dissipated.
Then nothing remained but to go home and wait for Arthur.

(S. Maugham, *The Magician*)

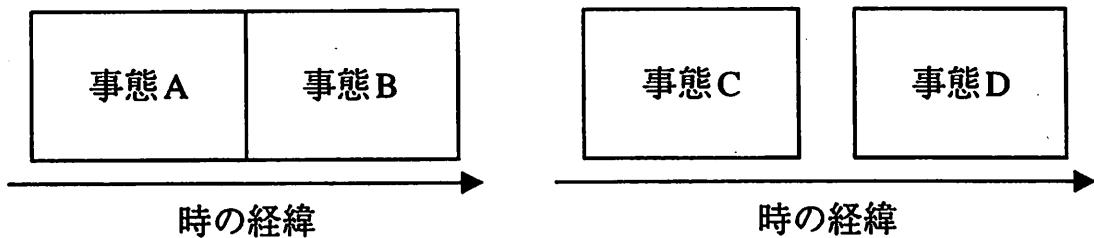
(22) On my telling him my name, he was really moved

(Charles Dickens, *David Copperfield*)

(23) Towards night an old woman came tottering up the garden as speedily as she could, and meeting the schoolmaster at the door, said he was to go to Dame West's directly, and had best run on before her. He and the child were on the point of going out together for a walk... (C. Dickens, *The Old Curiosity Shop*)⁸

(24) Though at thirteen going on fourteen, she no longer was a child, I reminded myself. (Kerri Sakamoto, *The Electrical Field*)

<図2>



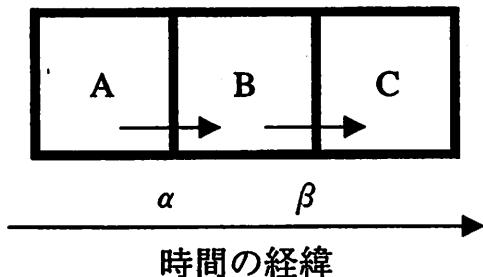
つぎは、OALD (*Oxford Advanced Learner's Dictionary*) を始めとする多くの学習用の英語辞典で「継続」のonと分類される(24)の用法を考察してみることにしよう。OALDでは、副詞用法の1番に挙げられているものであるが、これもonのプロトタイプである「接触」から拡張して出てきた意味である。

と考えた方が、理論的にも一貫性があり、そしてそのことが説明できれば有意義なものであろう。まず、時の接触を図3のように考える。事態A、B、Cのそれぞれが隣接関係にあり、そしてそこには時の個々の接触面（境界線） α と β が存在しているが、図4になると、その時の接触面 α と β が背景化し、事態A、B、Cが一体のものとして認識される。まさにこれが質的に異なる別の概念へ転換する「接触」から「継続」への転換プロセスである。このようなイメージ・スキーマ⁹の転換は、もっと一般的なイメージ・スキーマである「統合的スキーマ」と「離散的スキーマ」と言えよう。身近な例で説明すれば、通常、(26)のような不可算名詞であるhairが(27)のような可算名詞hairsに変換する際と同じ原理である。これらは、外部世界のどこに着目するかで、前景化するものと背景化するものが反転するという、認知プロセスと言語現象との間のダイナミックな現象を目の当たりにするものである。すなわち、主体のさまざまな解釈モードにとって特徴付けられる現象であると言つてよい。

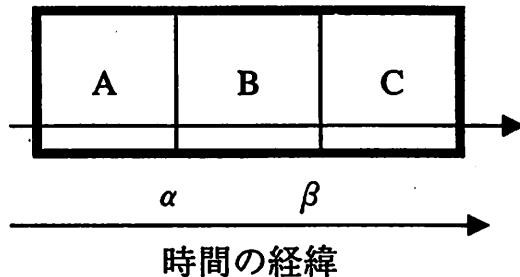
(25) He kept on walking.

(Nick Tosches, *In the Hand of Dante*)

<図3>



<図4>



(26) I made them all brush their hair off their foreheads, even if they had bangs.

(Ann Beattie, *Park City*)

(27) She had long black hairs on her legs

(Gini Alhadoff, *Diary of a Djinn*)

(28)や(29)に見られるonは品詞的には副詞である。認知意味論では語彙レベル、句レベル、構文レベルのいずれのレベルであっても、言語主体の概念化

の認知プロセスを反映しているのが、「意味」であり、いわゆる品詞は、文の要素間の関係を示すものにすぎないので、意味には直接的に関係しない。よって本稿では意味に関する考察に対して、品詞による区別をしていない。

(28) And winter is coming on, too.

(E. Caldwell, *An Autumn Courtship*)

(29) He went on stirring his tea.

(R. Carver, *Are You a Doctor?*)

最後に、2つの事態が同時に起きたことを強調したい場合の(30)の事例について言及しておこう。同時という事態には、隣接という接触ではなく、「点」としてのatが選択される。また、この同時性が強調され、内容的にマイナスの評価の事態だった場合、譲歩や逆接的な解釈が生じることになる。

(30) Now it was being followed by more snow, whipped by vicious winds which piled new drifts —— at the same time that ploughs were clearing the old.

(A. Hailey, *Airport*)

5. おわりに

本稿は、英語のonの多義性に関して、辞書的定義の問題点を指摘し、その解決策として認知意味論的観点により考察を進め、具体的な「接触」という概念が如何にして、抽象的時間の用法へ拡張されていくのかを明らかにした。また、副詞用法である「継続」の語義に関して、イメージ・スキーマを援用することでonのプロトタイプ的な意味である「接触」に関連付けを成功した。

いうまでもなく、言語の体系性という特性から考えても語を一語だけ、その語彙体系から抜き出して、記述説明するのには、無理がある。類似した概念との差異を捉えることで、その本質を掴むことが可能となろう。記述文法の時代からonの研究は、atとinを視野に入れながら進められたように、今後も本研究は他の語彙研究と連関させ継続していく予定である。

経験的にも無意味な記号列を覚えるより、ある程度意味づけされた記号列を覚えるほうが、単に容易に記憶されるだけでなく、より強固に記憶に残る。このような観点からも本研究の知見が学習者を支援する教授者にとっても有益な説明方法になり得るものと確信する。

¹ 認知意味論研究の英語教育への適用例として優れたものを挙げるとするならば、田中（1990、1993）、田中・松本（1997）、巻下・瀬戸（1997）などがある。

² 日本人英語学習者に対する英英辞典の有用性についての論考は埋橋（2001）がある。

³ 小西（1997:9-26）では、英語に於いて使用頻度の高い前置詞at、in、onの問題を扱っている。また、小西（1997:17）では、「atやinは、場所や場所の範囲なりの限定が強いのに対し、onは漠然と表面の接触を表すのに過ぎない」と説明している。

⁴ Yule（1998:158）では、前置詞を文法的な前置詞と語彙的な前置詞に大別している。これらの観点は、英語教育にとっては有用なものであろうが、認知意味論の立場からは、その大別はあくまでも相対的なものであり、文法と語彙の境界線は、連続体をなすものと考える。

⁵ このメトニミーやシネクドキに関するテーマは修辞学で従来扱われていたが、近年、認知言語学の台頭によって言語学からの考察も多数ある。Lakoff and Johnson（1980:35-40）では、メトニミーとシネクドキを分けずに議論している。本稿では事態の前後関係により「隣接」として捉え、この現象をメトニミーとして扱っている。

⁶ 「点」としてのatの考察に関しては、和田（1998）を参照のこと。

⁷ 「接触」の意味であるonが非接触である「近接」を表現しうることをここで言及しておこう。メタファーの意味は、いわば意味の移動現象であるが、元のAから移動先のBへと完全に「転じる」のではなく、元のAのもつ具体性、含意、連想などは、保っている場合がある。この接触から近接への意味の移動現象も、物理的には非接触であるが、心理的に接触しているという感覚が言語主体にはある。当然、客観的に近接の場合であっても、本

来、接触していたものが離れてしまった場合には、onは選択されない。(24)のように14歳に限りなく接近しつつあるという「方向性」がonを選択することの要因となっている。

⁸例文の下線は筆者によるものである。

⁹ことばの形成と概念化に先立って存在する心的表象に関わる認知能力のひとつで、「前後のスキーマ」、「容器のスキーマ」、「部分・全体のスキーマ」などがある。メトニミーの認知的基盤になっているものである。

¹⁰「統合的スキーマ」と「離散的スキーマ」に関しては、山梨（1995:125-7）を参照のこと。

参考文献：

- 小西友七 1997. 『英語への旅路——文法・語法から辞書へ』大修館書店.
- Lakoff, George & Mark Johnson 1980. *Metaphors We Live by* Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire, and dangerous things*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- 巻下吉夫・瀬戸賢一 1997. 『文化と発想とレトリック』研究社出版.
- Sweet H 1891. *A New English Grammar, Logical and Historical*. Clarendon Press, Oxford.
- 田中茂範 1990. 『認知意味論：英語動詞の多義の構造』三友社出版.
- 田中茂範 1993. 『わかる 覚える 使える 英単語ネットワーク前置詞・編』アルク.
- 田中茂範・松本曜 1997. 『空間と移動の表現』日英語比較選書 6 研究社出版.
- 田中茂範 2003. 「名詞の多義性」『市河賞36年の軌跡』307-315.
財団法人 語学教育研究所 編集代表 村田勇三郎 開拓社.
- 埋橋勇三 2001. 「英語の理解——語とそのイメージ——」
『白山英米文学』No. 26, 17-32.
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』ひつじ書房.
- 山梨正明 2000. 『認知言語学原理』くろしお出版.

Onの多義性：認知意味論の英語教育への貢献

和田四郎 1998. 「「点」としての at」『小西友七先生傘寿記念論文集 現代英語の語法と文法』小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会 代表：村田勇三郎 大修館書店。

Yule, George 1998. *Explaining English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

辞典類：

Simpson, J. A. 1989. *Oxford English Dictionary*, 2nd ed. Oxford: Oxford University Press

A. S. Hornby (著), Sally Wehmeier (編集) 2000. *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* 6th ed. Oxford: Oxford University Press